

## ■ 編集だより

## 編集後記

先日、歌舞伎を観る機会があった。毎年国立劇場で開催されている親子鑑賞教室で、演目は「義経千本桜」の「渡海屋の場」と「大物浦の場」。平家を壇ノ浦にて滅ぼしたものの、そののち源頼朝の怒りに触れた義経が、九州に逃れるべく大物浦（尼崎市）で船を待つ場面である。船問屋主人である銀蔵は、実は壇ノ浦で死んだはずの平家の大将平知盛で、安徳帝とその乳母である典侍の局とともに身を隠して復讐の機会を窺っていたところ、追われる身となった義経一行と遭遇し再び戦いを挑むという物語である。圧巻はやはり知盛の最期の場面で、白糸緋の鎧を染める鮮血と無数の矢を体に纏って必死に戦い息絶え絶えの中、帝の無事を見届けたのちに最後の力を振り絞り、自らの大きさ程もある大錠を持ち上げ諸共に海に身を投げる。知盛の壮絶な死と義経の情け、さらにはこの先義経一行に待ち構える苦難を思うと、涙なしには観られない名場面である。

さて、主役知盛を好演したのは尾上菊之助で、この大役を初演するにあたって「播磨屋の岳父（中村吉右衛門）に教えを受け」とある。典侍の局の中村梅枝は「今回は（坂東）玉三郎のおじ様に教わる」とパンフレットに書かれている。歌舞伎のインタビュー記事には、今回の役は誰彼に習ったと書かれていることが多い。このようにはっきりと書かれるから、きちんとしたものを伝えなければと教える方も必死だろうし、教わる方は自分の芸が不評を買っただけでなく、教えてくれた先輩にも泥を塗ってしまうことになるから、それ以上に一所懸命になるであろう。

医療に目を移すと、身体科においてはその手技をこうした形で習得することが依然として少なくないようだが、精神科においては比較的なじみが薄いように思われる。精神科には精神科の手技がある訳だが、目に見えない「こころ」を扱うためか、あまり明確に提示できるものでもなく、私も少しずつ教える側に立つようになってみて、その難しさを感じるのである。また、教える側には学びと経験に裏打ちされた冷静ながら確固たる自信も必要である。歌舞伎役者は日々の舞台上で自らの芸を観客の目にさらし、喝采や酷評を受けながら芸を磨き、それ故に先輩は後輩の役者に自信を持って教え伝えて、そして若手もその確かなものに近づこうと貪欲に学ぶ。精神科において、こうした自信を備えている医師はそんなに多くはなさそうである。面接を行う狭い診察室は閉じられ、その様子を他のスタッフが見聞きすることは少ない。多くのスタッフが見守る前で手術を行ったりする他の診療科とは、こういう点が大きく異なるように思われる。他者の目に触れにくいから精神科では批評を受けることも少なく、故にその治療技術に確たる自信を持つことが難しい。そうした状況の下で反対に過信に至ってしまうのも問題ではあるが。

再来年の2017年から、新たな専門医制度に基づく研修制度が始まる。これまで各科でその方法や基準が多様であったものが、今後はある程度統一されることになる。精神科もその独自性を保ちながら、他診療科に合わせていく部分が求められるであろう。新制度においては専攻医（現在の後期研修医）の研修に向けてより周到的なプログラムが生まれ、指導医の責務もより重いものになるようである。指導医に限らず先輩専門医は、患者のためはもちろんのこと後輩の研修のために、自らの技を「客観的」に吟味し再度整え直す準備が必要ではないかと思うのである。伝えるからには、確かなものを伝えねばならないであろう。

ところで、知盛や安徳帝の入水で壇ノ浦に平家一門は滅亡し、三種の神器のうち草薙剣は海深くに消えてしまう。知盛を討った義経は頼朝に追われて平泉で自刃し、源氏将軍家は鶴岡八幡宮において実朝が甥の公暁に襲われ三代で絶える。当時の武士にとって最も大切なその血脈でさえ、容易に次世代には残し得ない。かたちのない技芸ならば尚更である。故に私たちも持てる技能に磨きをかけ、伝え続ける努力を惜しんではならないであろう。